

二本松市の小中学校の適正規模について

【答申】

令和5年2月24日

二本松市立小学校及び中学校適正規模等調査検討会

目次

1	はじめに	・・・・・・・・・・・・・・・・	P 2
2	小・中学校の状況について	・・・・・・・・・・・・・・・・	P 3
	(1) 現状		
	(2) 今後の推移		
	(3) 複式学級等の比較		
3	適正規模について	・・・・・・・・・・・・・・・・	P 5
	(1) 基本的な考え方		P 5
	(2) 保護者、児童、教職員及び検討会委員の意見		P 7
	(3) 検討会答申		P 13
4	参考資料	・・・・・・・・・・・・・・・・	P 15
	・二本松市立小学校及び中学校適正規模等調査検討会委員名簿		
	・二本松市立小学校及び中学校適正規模等調査検討会の経過		
	・小・中学校の適正規模等に関するアンケート調査の実施状況		
	・適正規模についての意識調査の実施状況		
	・小学校「適正規模」に関する意見を聞く会の実施状況		
	(巻末資料)		
	・適正規模についての意識調査結果		
	・小学校「適正規模」に関する意見を聞く会の開催結果		
	・検討会委員の意見		

はじめに

二本松市の教育の振興については、令和3年度から令和12年度までの10年間を計画期間とする「二本松市総合計画」を基本とした教育分野における計画として、教育大綱の理念である「未来を創る、心豊かで、たくましい人間の育成」を実現するため、令和3年3月に計画期間を令和3年度から令和12年度までの10年間とする「二本松市教育振興基本計画」（第2期）を策定しております。

教育大綱の理念を実現していくためには、城下町として栄えた伝統的な歴史文化と豊かな自然環境を併せ持つ本市で、これから未来を担う児童生徒にとって学びやすい環境を整えていく必要があると考えます。

平成17年度に1市3町が合併した当時は、小・中学生は5,799人でありましたが、17年後の令和4年5月には3,620人となり、2,179人も児童生徒が減少したことになります。本市においても、少子化傾向を改めて強く印象付けるものとなりました。この間、学校においては複式学級が増えるなど、児童生徒の教育環境も変化しており、これからも少子化の波が一層加速していくものと予想されます。

国では、少子化の影響から過度の小規模化や教育条件への影響が懸念されることから、平成27年1月に文部科学省から「公立小学校・中学校の適正規模・適正配置等に関する手引き～少子化に対応した活力ある学校づくりに向けて～」が示され、それぞれの地域の実情に応じた主体的な検討の指針となっています。

本市においても、少子化は顕著に現れており、さらに小・中学校の立地状況も異なる背景もあることから、地域により児童生徒数の増減も大きく異なっている現状にあります。

そのような中、二本松市立小学校及び中学校適正規模等調査検討会（以下、「検討会」という。）は、児童生徒の減少に伴う教育環境の整備及び学校教育の充実を図ることを目的に、二本松市教育委員会から小・中学校の適正規模及び適正配置に関することについて諮問を受け、「学びやすい教育環境」の検討が求められました。検討会では、段階的に検討することが重要と捉え、令和元年8月29日の第1回検討会開催以後、「適正規模」について検討を重ねてきました。

今回、適正規模についての答申をまとめましたので、本答申が今後の本市教育行政に寄与することを期待します。

二本松市立小学校及び中学校適正規模等調査検討会

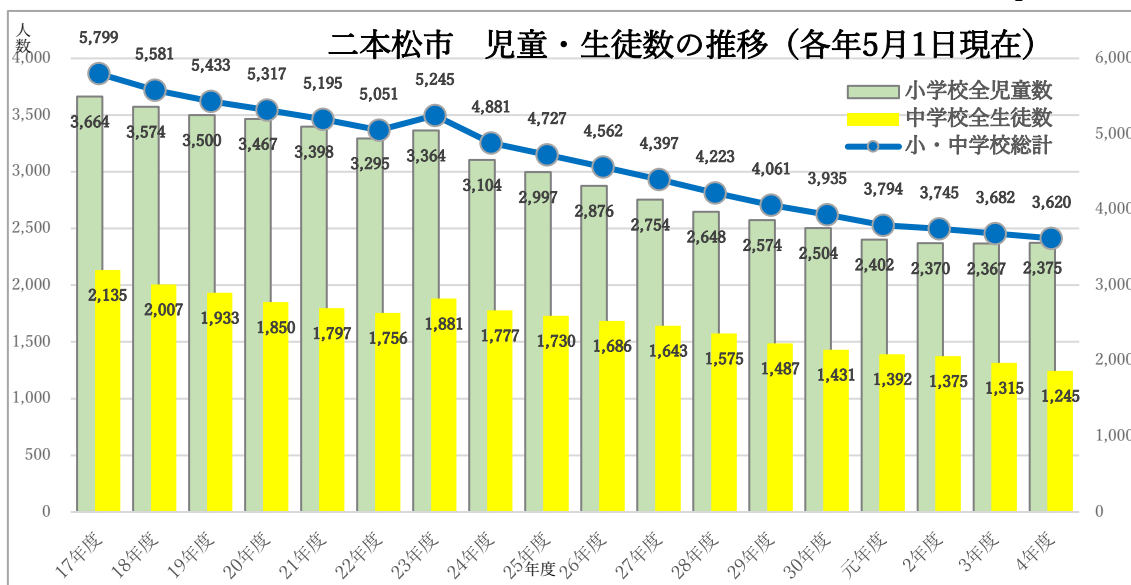
会 長 青 田 誠

2 小・中学校の状況について

(1) 現状

平成17年度の合併以後、今年度までの推移は【グラフ1】のとおりです。小学校で1,289人の減、中学校で890人の減となり、合わせて2,179人の減となっています。

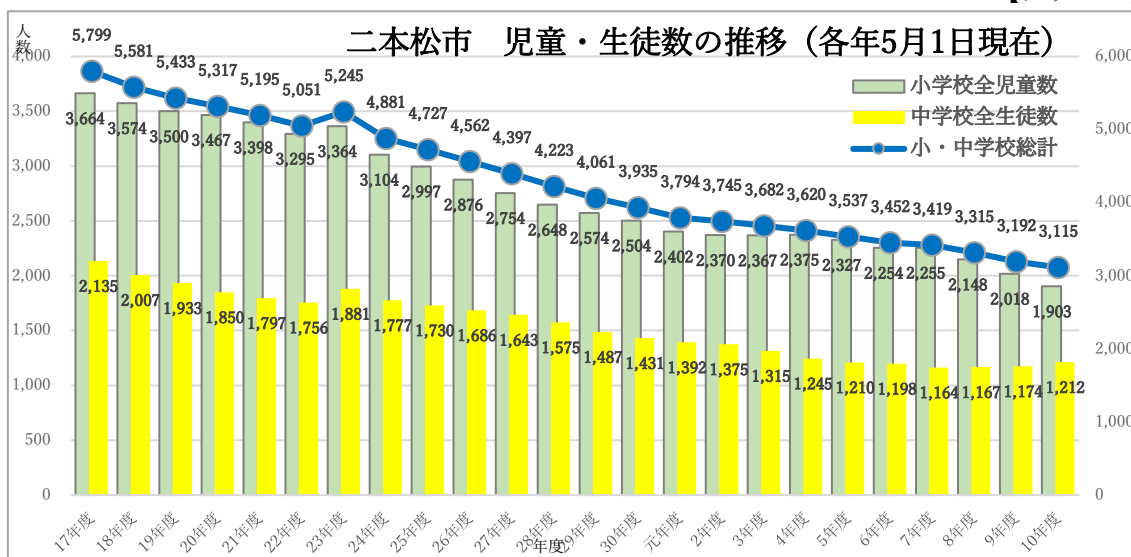
【グラフ1】



(2) 今後の推移

令和10年度に小学校1年生となる児童を想定した場合の予測推移は、【グラフ2】のとおりです。令和4年度と令和10年度を比較すると、小学校で472人の減、中学校で33人の減となり、合わせて505人の減と予測されます。

【グラフ2】



※5年度以降は見込み

(3) 複式学級等の比較（令和4年度と令和10年度）

現在、本市小・中学校23校中複式学級が存在する小・中学校は4校、複式学級以外で10人以下の学級が存在する学校は3校です。6年後の令和10年度の推計を見ると、複式学級が存在する小・中学校は6校、複式学級以外で10人以下の学級が存在する小・中学校は5校と【表1】のとおり予測されます。

【表1】

令和4年5月1日現在

■小学校 単位：人
 複式学級 10人以下の学年

	1年生	2年生	3年生	4年生	5年生	6年生	合計
二本松南小	42	44	44	41	27	43	241
二本松北小	54	65	59	54	61	62	355
塩沢小	14	10	20	10	15	16	85
岳下小	32	22	33	21	37	34	179
安達太良小	5	6	10	9	10	4	44
原瀬小	7	7	9	7	7	10	47
杉田小	28	34	43	33	32	35	205
石井小	13	19	14	7	18	19	90
大平小	11	20	10	17	20	21	99
油井小	98	90	76	67	59	63	453
渋川小	26	11	15	14	13	12	91
川崎小	17	15	17	22	18	14	103
小浜小	14	19	23	14	29	27	126
新殿小	2	4	7	6	5	3	27
旭小	1	2	1	7	5	8	24
東和小	30	32	37	27	36	44	206
合計	394	400	418	356	392	415	2,375

■中学校 単位：人

	1年生	2年生	3年生	合計
二本松一中	113	110	138	361
二本松二中	34	49	43	126
二本松三中	68	69	84	221
安達中	111	94	103	308
小浜中	19	28	28	75
岩代中	15	14	16	45
東和中	31	41	37	109
合計	391	405	449	1,245

令和10年度

■小学校 単位：人
 複式学級 10人以下の学年

	1年生	2年生	3年生	4年生	5年生	6年生	合計
二本松南小	37	31	36	35	40	38	217
二本松北小	42	40	43	50	42	56	273
塩沢小	8	4	8	6	9	11	46
岳下小	28	20	23	31	24	23	149
安達太良小	5	3	2	8	6	3	27
原瀬小	6	1	11	7	11	5	41
杉田小	28	26	21	33	29	27	164
石井小	7	14	10	23	10	17	81
大平小	13	10	14	13	14	13	77
油井小	65	77	90	90	81	90	493
渋川小	8	9	10	12	12	14	65
川崎小	6	6	10	10	5	11	48
小浜小	5	10	11	9	15	15	65
新殿小	1	4	4	6	3	7	25
旭小	3	2	0	1	1	2	9
東和小	17	13	18	23	18	34	123
合計	279	270	311	357	320	366	1,903

■中学校 単位：人

	1年生	2年生	3年生	合計
二本松一中	110	119	123	352
二本松二中	24	39	24	87
二本松三中	72	69	95	236
安達中	141	116	108	365
小浜中	14	19	23	56
岩代中	3	6	8	17
東和中	30	32	37	99
合計	394	400	418	1,212

3 適正規模について

(1) 基本的な考え方

■国による学級数の基準（学校教育法施行規則第41条）

学校の学級数は、12学級以上18学級以下を標準とする。ただし、地域の実態その他により特別の事情があるときは、この限りでない。
 ※第79条 中学校も小学校の規定に準用

■国と県による学級編制の基準

(小学校)

【表2】

年度	国の基準	県の基準
令和4年度	1～3年：35人 4～6年：40人	1～2年：30人 3～6年：33人
令和5年度	1～4年：35人 5～6年：40人	1～2年：30人 3～6年：33人
令和6年度	1～5年：35人 6年：40人	1～2年：30人 3～6年：33人
令和7年度	1～6年：35人	1～2年：30人 3～6年：33人

※複式学級：2つの学年合計で16名以下は複式学級編制（1学年を含む場合は8名以下）

(中学校)

【表3】

年度	国の基準	県の基準
令和4年度 ～	1～3年：40人	1年：30人 2～3年：33人

※複式学級：2つの学年合計で8名以下は複式学級編制

■過小規模校・極小規模校（公立小・中学校の国庫負担事業認定申請の手引きから引用）

【表4】

区分	極小規模校	過小規模校	小規模校	適正規模校	大規模校	過大規模校
小学校 学級数	1～3	4～5	6～11	12～ 18	19～ 30	31 学級 以上
中学校 学級数	—	1～2	3～11			

■本市小・中学校の規模について

令和4年度において、国が示す適正規模に適合するのは、小・中学校全23校中、小学校2校のみとなっています。現在、本市が学級編制を行うにあたり参酌している県の基準に照らすと、令和4年度の適正規模校は、小学校は2校、中学校は1校となっています。6年後の令和10年度の推計を見ると、適正規模校は、小学校は3校、中学校は2校と、合わせて2校増えることが予想されます。これは、市街地に立地する小・中学校にその傾向がみられます。一方、小規模校に分類されている小学校が、過小規模校、極小規模校へ移行していくことが【表5】のとおり予測されます。このため、過小規模校や極小規模校の今後の「学びやすい教育環境」づくりが求められています。

【表5】

	学校名	令和4年度					令和10年度				
		学校規模	児童生徒数	学級数(県)	学級数(国)	学校規模	児童生徒数	学級数(県)	学級数(国)		
小学校	二本松南小	△ 小規模校	241	11	10	◎ 適正規模校	217	12	10		
	二本松北小	◎ 適正規模校	355	13	12	◎ 適正規模校	273	12	12		
	塩沢小	△ 小規模校	85	6	6	▲ 過小規模校	46	4	4		
	岳下小	△ 小規模校	179	8	6	△ 小規模校	149	6	6		
	安達太良小	▲ 過小規模校	44	4	4	● 極小規模校	27	3	3		
	原瀬小	▲ 過小規模校	47	4	4	▲ 過小規模校	41	4	4		
	杉田小	△ 小規模校	205	9	7	△ 小規模校	164	6	6		
	石井小	△ 小規模校	90	6	6	△ 小規模校	81	6	6		
	大平小	△ 小規模校	99	6	6	△ 小規模校	77	6	6		
	油井小	◎ 適正規模校	453	16	15	◎ 適正規模校	493	18	17		
	渋川小	△ 小規模校	91	6	6	△ 小規模校	65	6	6		
	川崎小	△ 小規模校	103	6	6	▲ 過小規模校	48	4	4		
	小浜小	△ 小規模校	126	6	6	△ 小規模校	65	6	6		
	新殿小	● 極小規模校	27	3	3	● 極小規模校	25	3	3		
	旭小	● 極小規模校	24	3	3	● 極小規模校	9	3	3		
	東和小	△ 小規模校	206	9	7	△ 小規模校	123	6	6		
	合計		2,375	116	107	合計	1,903	105	102		
中学校	二本松一中	◎ 適正規模校	361	13	10	◎ 適正規模校	352	12	10		
	二本松二中	△ 小規模校	126	6	4	△ 小規模校	87	4	3		
	二本松三中	△ 小規模校	221	9	7	△ 小規模校	236	9	7		
	安達中	△ 小規模校	308	10	9	◎ 適正規模校	365	13	10		
	小浜中	△ 小規模校	75	3	3	△ 小規模校	56	3	3		
	岩代中	△ 小規模校	45	3	3	△ 小規模校	17	3	3		
	東和中	△ 小規模校	109	5	3	△ 小規模校	99	4	3		
	合計		1,245	49	39	合計	1,212	48	39		

※ 学校規模は、県の学級編制基準による学級数による。

◎は適正規模校（12～18学級） △は小規模校（小学校6～11学級・中学校3～11学級）

▲は過小規模校（小学校4～5学級・中学校1～2学級） ●は極小規模校（小学校1～3学級）

また、小・中学校における複式学級についても、令和4年度は10学級あったものが、令和10年度には14学級と、【表6】のとおり予測されます。

【表6】

令和4年度	小学校	中学校	令和10年度	小学校	中学校
複式学校数	4校	0校	複式学校数	6校	0校
複式学級数	10学級	0学級	複式学級数	14学級	0学級

(2) 保護者、児童、教職員及び検討会委員の意見など

◆適正規模についての意識調査結果（アンケート調査結果）

(複式学級が存在する4小学校の児童、保護者及び教職員を対象に実施しました。 ※4小学校とは、安達太良小、原瀬小、新殿小、旭小)

① 設問1 学級規模の大きさについて

区 分	児童	保護者	教職員
10名まで	42%	22%	4%
10～20名	49%	68%	75%
20～30名程度	9%	9.5%	21%

児童、保護者及び教職員とも、10～20名が学びやすい回答が多い結果でした。児童については、10名までの回答も多い状況でした。

② 設問2 学級の規模の大きさについての理由（複数回答）

区 分	児童	保護者	教職員
A丁寧で、きめ細かな指導を受けることができる。	23%	52%	54%
B友だちの様々な考え方にふれ、多くの友達と関わりをもつことができる。	37%	16%	79%
C一人一人の活躍の場が増え、自分や友達によさに気付くことができる。	10%	10%	46%
D様々な役割を経験でき、自分のよさや可能性に気付くことができる。	0.7%	5%	46%
E互いに協力する場が増え、思いやりや寛容の心を育てることができる。	4%	7%	57%
Fゆとりや安心感など、親和的な雰囲気の中で学習や生活ができる。	20%	9%	43%
G互いに刺激し合い、磨き合う中で、自分自身を高めることができる。	18%	14%	68%
Hその他	6%	18%	4%

児童と教職員はBの回答が多く、保護者はAの回答が多い結果でした。また、教職員は、Bに次いでGも回答が多い結果となりました。

③ 設問3 複式学級に対する意識

区 分	児童	保護者	教職員
学びやすい	23%	4%	4%
複式学級ではない方式が学びやすい	30%	39%	82%
どちらでもよい	47%	57%	14%

児童及び保護者は、どちらでもよい回答が多く、次に複式学級でない方式が学びやすい回答も多い結果でした。教職員は、複式学級でない方式が学びやすい回答が極めて多い結果でした。

④ 設問4 学年の規模（大きさ）について

区 分	児童	保護者	教職員
1 学級	53%	39%	11%
2 学級	37%	50%	78%
3 学級	6%	8%	11%
4 学級以上	4%	2%	0%

児童は1学級、保護者及び教職員については2学級の回答が多い結果でした。

⑤ 設問5 学年の規模（大きさ）についての理由（複数回答）

区 分	児童	保護者	教職員
A 丁寧で、きめ細かな指導を受けることができる。	11%	16%	7%
B 友だちの様々な考え方にふれ、多くの友達と関わりをもつことができる。	36%	21%	79%
C 一人一人の活躍の場が増え、自分や友達のよさに気付くことができる。	6%	5%	25%
D 様々な役割を経験でき、自分のよさや可能性に気付くことができる。	1%	5%	43%
E 互いに協力する場が増え、思いやりや寛容の心を育てることができる。	4%	15%	39%
F ゆとりや安心感など、親和的な雰囲気の中で学習や生活ができる。	30%	14%	21%
G 互いに刺激し合い、磨き合う中で、自分自身を高めることができる。	8%	26%	79%
H その他	18%	33%	14%

児童はB、保護者はその他を回答した方が多く、教職員はBとGの回答が多い結果でした。

学級規模については、児童、保護者及び教職員とも10～20名の回答が多く、特に児童においては10～20名と回答している割合が49%であり、10名までの42%と拮抗しています。これらの2つの結果は、少人数で指導を受けている現状に概ね不満を感じていないと考えられますが、設問2の学級の規模の大きさにおける児童の回答から、少人数であっても、より多くの友達との関わりを求めていることも推測されます。保護者の回答では、丁寧で、きめ細やかな指導を望むことが強く表れています。複式学級については、児童・保護者ともどちらでもよいとする回答が多いことは、非常勤講師の配置等により、指導の充実を図っていることに加え、各学校の教職員がきめ細やかな指導を行っていることが、現状の複式学級の指導体制への不満が少ない理由と考えられます。学年規模についての根拠では、児童は多くの友達との関わりを3割強求めているのに対し、教職員の回答は、多くの友達と関わりもつことと、互いに刺激し合い磨き合い、自分自身を高めることのそれぞれの項目が約8割近くであり、児童に協調性や社会性、向上心などを身に付けさせたい意向が強いと考えられます。

なお、詳細は巻末資料のとおりです。

◆小学校「適正規模」に関する意見を聞く会の意見

(複式学級が存在する4小学校の保護者を対象に実施しました。 ※4小学校とは、安達太良小、原瀬小、新殿小、旭小)

保護者の皆さんより出された代表的な意見をまとめると次のとおりとなります。複式学級についての考え方及び意見等が主なものとなっています。

区分1	区分2	意見
生活面	メリット	<ul style="list-style-type: none"> ・児童数が少ないので、教職員に良く見られている。 ・最初は不満だったが、(5・6年生の)上級生や下級生の仲がよく、先生方もよく見ていただいているのでありがたい。 ・学年ごとに先生の温かく細やかな指導・援助がある。寄り添ってもらっている。感謝しかない。学習面の支援も丁寧にしていただいている。小規模校のよさである。 ・上下や年齢関係無く、いろんな子たちと仲良く繋がりを持つてるといことはある。 ・子供2人が複式学級を経験した。デメリット的なことは私自身あまり感じたことはなかった。小規模校、複式学級で良かったと思っている。
	デメリット	<ul style="list-style-type: none"> ・中学校も少ない人数、高校に入学した時多くの人数となり、気後れしないか心配である。 ・目が行き届いてしまうことにも課題がある。大人数で目が行き届かずほっとする場面も必要なこともある。 ・児童数が少ないといろんな子どもの価値観、多様性という意味でちょっと心配だと思う。 ・登下校の関係。小学校は人数が少ないとどうしても親の送迎となってしまう。児童数がいれば一緒に歩いて集団登校ができるが、一人で歩かせることはできない。 ・このまま人数が減ってきてしまうと今は大丈夫かも知れないけれど、将来に不安を感じる。
		「どちらとも言えない。」意見もありました。
学習面	メリット	<ul style="list-style-type: none"> ・一人一人にかける時間があり、一人一人きめ細やかに目をかけていただいている。 ・それぞれの学年に分かれての指導となるため、先生にはよく見ていただいている。 ・授業の様子を見ると先生は大変そうだが、1年生と2年生がそれぞれの学習にふれる機会もあり、このままでもいいのかと思っている。 ・先生に大変目を掛けて貰っており、大きな学校では経験できないことであるなど思っている。 ・勉強の教え方として、子どもが複式学級を経験した中で、国語、算数、理科、社会はそれぞれ別でやっていた。ただ、体育は他の学年と一緒にやるというところはあるが、問題は無かったと感じている。 ・勉強に集中できること。人数が少なければ先生の目が届きやすいのもある。これは良い点だと思う。
	デメリット	<ul style="list-style-type: none"> ・比べる対象が少ない。少ない人数の中で満足してしまっている。本当はできていな

		<p>いことも、できていると思ってしまうことがある。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・複式学級に関してはどちらかという不安が大きいというのが率直なところである。 ・例えば、自分の子どもが複式学級で上の学年になった場合、1時間の授業の中でどうしても授業の質として半分の時間にしかならないのではないか、授業の量として不足するのではないかとの不安がある。 ・2年生と3年生で学ぶことが違うので、先生があちらを教えたり、こちらを教えたりすると戸惑ってしまうのではないかとと思う。
		「どちらとも言えない。」意見もありました。
集団活動	メリット	意見なし
	デメリット	<ul style="list-style-type: none"> ・運動会等の大きな行事では一人ずつすぐに出る機会があり、緊張を解く機会がない。 ・少ないため集団生活での競技での困難さ、積極性や競争心に欠ける。 ・集団生活の面で確かに萎縮してしまうことや積極性に欠けることがある。小規模の人数に慣れていることが心配である。 ・児童数が少ないと集団の競技等で切磋琢磨ではないが、井の中の蛙のようで中学校にいった際に自信を無くしてしまうのではないかと心配される。
		「どちらとも言えない。」意見なし。
その他		<ul style="list-style-type: none"> ・PTA活動において、親同士が垣根を越えて下の学年の子供を把握できる。 ・PTA役員の人事では、実家庭数が少ないので親の負担が重い。

複式学級・過小規模校については、学年関係なく一人一人きめ細やかに指導がなされていることがよいとする反面、多くの友達との集団活動で学ぶ社会性や協調性、積極性や競争心などが十分に育たないことで、進学をするに当たって心配であるとの声も寄せられました。

なお、詳細は巻末資料のとおりです。

◆適正規模等調査検討会委員の意見集約

調査検討会の開催を重ね、本市における小・中学校の状況を把握し、少子化の進行に伴う今後の児童生徒の減少を鑑みまして、各委員が適正規模等に関する意見を取りまとめました。各地域に存在する小・中学校について地域の実情に応じた異なる課題も存在する中で、各委員においては本市を俯瞰した考え方や地域属性を考慮する考え方など、多面的な考え方を踏まえ、意見を整理したところです。ここでは、代表的な意見を以下のとおり集約いたしました。

No.	意見
1	<ul style="list-style-type: none"> ・法令上、学校規模の標準は、「12学級以上18学級以下」が標準とされているが、二本松市の特性等を考え合わせるとこの学級数に縛られる必要性はないと感じる。・アンケートの結果を見ると、児童、保護者、教職員が1学級10名から20名の児童数が学びやすいと考えている。このことから1学級の児童数の目安になるのではないかと感じる。ただ、将来的な児童数の減少等を考え合わせると明確な基準ではなく目安にとらえる必要がある。 ・今後、その問題にも丁寧な説明と地域の特性を分析しながら進めていかななくてはならないと考える。
2	<ul style="list-style-type: none"> ・二本松市の現状から、適正規模の人数は1クラス(15～20人)程度で考えていくのが妥当かと思う。これからの児童数の減少を考慮し、数年ごとに段階を踏みながら統合を重ねていく計画で、適正規模を保てるようにしていければ良いのではないかと。
3	<ul style="list-style-type: none"> ・複式学級に対し教職員の方が、複式学級ではない方が学びやすいと考えている方が82%…先生方が感じるという事は、きっと子供達も感じているのではないかとと思うと複雑な気持ちになります。 ・先生方の負担を考えると複式学級の難しさを痛感しました。 ・地域の中に子供がいて、子供がいるから学校がある。学校があるから先生方がいる。本当にそうなのだと感じました。地域にとって学校がある事は活力、とても心にひびきました。
4	<ul style="list-style-type: none"> ・資料2のアンケート結果に関して、児童に直接尋ねている以上、児童の声をどう生かすかが問われていると考えます。これは国内外の動向を踏まえてのことでもあります。(なお、その意味では、中学生の意見も聞く必要があるかもしれません。)アンケート結果については、児童の声からの結果を中心としつつ、保護者、教職員の声を踏まえることが重要だと考えます。数値をそのまま採用するわけにはいきませんが、設問1で「10名まで」も4割以上の児童が学びやすいと考えている点や、設問4で保護者と教職員と異なり「1学級」が最多であること、設問5で「ゆとりや安心感など、親和的な雰囲気の中で学習や生活ができる」という理由が第2位であることも十分に考慮する必要があると考えます。児童の声をできる限り反映させ、そのことを児童に返すなど、地域の教育行政のプロセスに児童たちが参加している感覚が持てれば、生まれ育った地域を大事にする児童の思いを育む方向にもなるのではないかと思います。
5	<ul style="list-style-type: none"> ○「学校は、地域の学校で、地域の活力である」 ・学校が、地域からなくなるということは、地域の活性化や元気がなくなるという意見を再確認したい。そのため、十分に地域の方々の考えを取り入れ、今後どうしたいかを話し合う場が重要であると考えます。 ・今回の「適正規模」の調査結果から <ul style="list-style-type: none"> 「学級規模」…児童、保護者、教職員共に「学級規模10名～20名」 「学年規模」…児童「1学級」、保護者、教職員「2学級」

6	<ul style="list-style-type: none"> ・特に小規模校においても適正規模として10人～20人程度のクラス編制ができる規模が望ましいのではないかと考える。 ・例えば小規模校の場合、一人の児童の変動により単式か複式になる場合がある。このことは教職員の配置数にも影響する。できるだけこのようなことを避ける意味でも適正規模として10～20人程度が望ましいのではないかと考える。
7	<ul style="list-style-type: none"> ・少子化による影響が多いため、様々な意見があるものの結果として、意見を述べるだけで停滞しているように感じます。少しでも今回の意見等を含め、前に進めれば良いのではないかと思います。子供が少ない状況で中学校での部活動も制限されています。(やりたい部活動が無い)など。
8	<ul style="list-style-type: none"> ・一学級の適正規模の人数は16～20人または21～25人が考えられると思います。 ・また、小学校と中学校の校種でも考えが異なると思います。中学校の行事や部活動を考えますと、1学年に2学級あることが望ましいと考えます。
9	<ul style="list-style-type: none"> ・アンケート結果が示している通り、学級の規模、学年の規模、意見通りにするのが適切と思う。 ・複式学級については、どちらでもよいとなっているが、現場での指導者は先生方なので、やりやすい方法でやってもらいたい。
10	<ul style="list-style-type: none"> ・学級の規模(大きさ)について 10名～20名程度が望ましい姿と感じる。 ・複式学級について 複式学級でもよいと考える。 ・学年の規模(大きさ)について 1学級～2学級が学びやすいと考える。 ・子供たちが発する元気な声は「地域に活力」を与え、学校から発せられるあらゆる音声は「地域の生産活動のリズム」を生み出す等、地域の日常生活に欠かすことの出来ない存在である。この様な観点に立って、地域のあるべき姿と、学校が地域に及ぼす価値観等総合的に検討すべきでないかと考える。
11	<ul style="list-style-type: none"> ・適正規模についての意見という事ですが、いろいろな人に意見を聞くと通学について不安があるようです。特に冬の凍結路面や雪道の運転が不安なようです。 ・現在、小浜小学校もかなり人数が減っていますが、例えば小学校では3年後には100人を切ってしましますが、1年生から6年生までみんな仲良く、全員の名前を覚えられるような感じで生活しています。それが良いのか悪いのかは分かりませんが、個人的にはとても良い事だと思っています。
12	<ul style="list-style-type: none"> ・意識調査の結果、そして教員として立場からも、10～20人程度の学級編制となる規模を確保できることが望ましいと考える。 ・地域に開かれた学校づくりの推進によって、「わが地域のわが学校」は存続していけると考える。
13	<ul style="list-style-type: none"> ・1学級の適正規模は10人から20人が望ましいが、通学距離の影響や地域住民の意向をふまえて、たとえ10名以下であっても複式学級の編制を避けることができるのであれば、適正としてもよいものとする。 ・1学年の適正規模は、2学級以上が望ましいが、1と同様に判断して、1学級以下であっても適正としてよいものとする。 ・1学校の適正規模は、小学校では6学級以上、中学校では3学級以上が望ましいが、1と同様に判断して、それ以下であっても適正としてよいものとする。 ・上記1～3は、統廃合時点での基準とし、出生数の推移から将来の児童生徒数の減少を見込んだ判断をすることは避けること。 ・「地域住民の意向」とは、住民説明会での意見やアンケート結果の集約をもとに審議を行い、教育委員会に答申するものとする。
14	<ul style="list-style-type: none"> ・20人～30人が適正規模かと考えます。 ・子供達が将来社会の一員になった時の、コミュニケーション能力を培う為にも、多くの人数の中で生活するのが望ましいと考えます。

なお、詳細は巻末資料のとおりです。

(3) 検討会答申

本市における適正規模の基本的な考え方について、「適正規模についての意識調査内容」並びに「小学校適正規模に関する意見を聞く会の意見聴取内容」を踏まえて議論された適正規模等調査検討会の論点を整理するとともに、各学校が置かれている本市特有の地域の実情も考慮し、下記の通り答申いたします。

記

国や県の学級編制の基準を勘案し、一般的な適正規模の見解を示せば、1学級の児童生徒数については、クラス替えやグループ編成を可能とする「10名～20名」以上を想定することが望ましいと考えます。また、1学年の学級数については、全学年でクラス替えを可能としたり、学習活動の特質に応じて学級を越えた集団が形成したりできる小学校では、1学年に2学級以上 全体で12学級以上

中学校では、1学年に2学級以上 全体で6学級以上が望ましいと考えます。

一方で上記に示した見解は、複式学級を回避することを優先するがあまり、場合によっては、地域から学校がなくなるという結果をもたらすことにもつながりかねません。本市は、平成17年度に1市3町が合併し、それぞれの地域の独自性や多くの多様性を認め合いながら、市民の協働による魅力ある地域づくりが図られてきている経緯を踏まえれば、地域から学校がなくなる可能性を秘めた方針を軽々に示すことは避けなければなりません。

小規模校を中心とした児童生徒や保護者、地域の方々からいただいた「適正規模についての意識調査内容」並びに「小学校適正規模に関する意見を聞く会の意見聴取内容」からは、

- ・ 学校生活の中で、先生方の温かく細やかな指導助言をいただいている。(保護者)
- ・ 学習面でも、一人一人へきめ細やかに目をかけていただいている。(保護者)

など、複式学級に対して肯定的な意見を多くいただきました。

他方、複式学級における課題としては、

- ・ 複数学年の指導を同時に行うのは教えるににくい。(教職員)
- ・ 児童生徒に、積極性や社会性等を育みにくい。(保護者・教職員)

との指摘も示されております。

このような本市の実情や市民感情を踏まえ、本市の適正規模について、適正規模等調査検討会として、以下の通り見解を示します。

本市独自に、地域とともに持続可能な学校を目指すうえで、学級数や学級の人数を数値化して規定し、それに基づき、適正配置を機械的に行うことは望ましいことではないと考えます。しかしながら、「主体的・対話的で深い学び」を基調とするこれからの教育の方向性を踏まえれば、これからの厳しい時代を生き抜くための協働的な学びが必要不可欠であり、その実現のためには、各学年の最少人数は4名以上とすることが望ましいと考えます。したがって、各学校が各学年4名未満となった場合に、他学校とのICT(オンライン)活用などの試みも大切であり、学びの成果が認められない場合は、適正配置の段階で検討していく必要があると考えます。

また、児童生徒の学びの連続性や学びの深まりを考えれば、9年間の学習内容の系統性を踏まえた弾力的な教育課程とする「義務教育学校」或いは「小・中一貫校」も選択肢の一つとして検討する必要があります。

なお、本市の実情に即した少人数教育を更に充実させていくために、

- 1 児童生徒の向上心や社会性等の低下を改善、向上させていくために、実効性のある方策を示すこと。その際、ICT機器の活用やコミュニティスクールの活用等も視野に入れて検討すること。
 - 2 児童生徒が主体的に学ぶことができる複式学級の授業の質的改善について、更に教職員の研修を充実させること。
- に、同時進行で取り組む必要があることも申し添えます。

參考資料

◆令和元年度～

(敬称略)

番号	氏名	所属役職	選出区分
1	阿内 春生	福島大学人間発達文化学類准教授	学識経験者
2	坂本 篤史	福島大学人間発達文化学類准教授	
3	(会長) 糺田 惣男	福島大学人間発達文化学類特任教授	
4	佐藤 和彦	福島大学学校臨床支援センター特任教授	
5	菅野 誠	二本松第二中学校PTA会長	保護者
6	鈴木 智美	川崎小学校PTA副会長	
7	嶋原 勝則	岩代中学校PTA会長	
8	村松 香里	東和小学校PTA会長	
9	齋藤 恵	小浜幼稚園PTA会長	
10	安田 有沙	はらせ幼稚園保護者会長	
11	岩淵 孝	杉田小学校長	学校関係者
12	(副会長) 渡邊 健順	安達中学校長	
13	佐藤 敏宏	小浜小学校長	
14	原田 博司	東和中学校長	
15	松尾 陽子	大平幼稚園長	
16	野地 文子	油井幼稚園長	
17	桑原 和夫	二本松市区長会副会長	地域関係者
18	遠藤 次雄	二本松市区長会副会長	
19	菅野 正信	二本松市区長会副会長	
20	齋藤 康正	二本松市区長会副会長	
21	菅野 弘	二本松市区長会副会長	

◆令和4年度～

(敬称略)

番号	氏名	所属役職	選出区分
1	(副会長) 坂本 篤史	福島大学人間発達文化学類准教授	学識経験者
2	耕田 惣男	福島大学人間発達文化学類特任教授	
3	高野 孝男	福島大学人間発達文化学類附属 学校臨床支援センター特任教授	
4	(会長) 青田 誠	元福島県教育庁県中教育事務所長	
5	鈴木 千鶴	二本松第三中学校PTA会長	保護者
6	清野 陽三	渋川小学校PTA会長	
7	大内 和晃	小浜小学校PTA副会長	
8	村松 香里	元東和中学校PTA会長	
9	善方 尚	岩代幼稚園保護者会長	
10	渡辺 愛	元油井幼稚園保護者会長	学校関係者
11	安齋 憲治	二本松南小学校長	
12	児山 秀典	油井小学校長	
13	遠藤 幸栄	安達中学校校長	
14	大和田康夫	二本松第二中学校長	
15	松尾 陽子	杉田幼稚園長	地域関係者
16	大内 文男	二本松市区長会長 (二本松地域区長会長)	
17	服部 敏明	二本松市区長会副会長 (安達地域区長会長)	
18	大内 和長	二本松市区長会副会長 (岩代地域区長会長)	
19	関 清崇	二本松市区長会代議員 (東和地域区長会副会長)	

■第1回検討会

日 時 令和元年8月29日（木）10：00

場 所 二本松市役所正庁

議 事

- (1) 二本松市立小学校及び中学校適正規模等調査検討会について
- (2) 児童生徒数の推移等について
- (3) 文部科学省の学校規模の適正化に関する基本的な考え方
- (4) 適正規模等について
- (5) その他（各委員から初回調査検討会に出席しての意見、感想等）

■第2回検討会

日 時 令和元年11月7日（木）8：45

場 所 二本松北小学校・旭小学校

視 察

- (1) 二本松北小学校
- (2) 旭小学校

■第3回検討会

日 時 令和2年2月17日（月）13：00

場 所 二本松市役所正庁

議 事

- (1) 二本松市学校施設長寿命化計画の素案について

■第4回検討会

日 時 令和2年3月24日（火）13：30

場 所 二本松市役所601会議室

議 事

- (1) 小中学校の適正規模等に関するアンケートの内容について
- (2) その他

■第5回検討会

日 時 令和3年2月5日（金）9：00

場 所 二本松市役所正庁

議 事

- (1) 小中学校の適正規模等に関するアンケート調査の結果について
- (2) その他

■第6回検討会

日 時 令和4年8月17日（水）9：30

場 所 二本松市役所正庁

議 事

- (1) 前回までの検討経過報告について
- (2) 小中学校の適正規模・適正配置について
- (3) 今度のスケジュールについて

■第7回検討会

日 時 令和4年11月7日（月）14：00

場 所 二本松市役所正庁

議 事

- (1) 小学校「適正規模」に関する意見を聞く会開催結果について
- (2) 学校における学びやすい環境についての意見調査結果について
- (3) 「適正規模」の検討 ※グループ討議
- (4) その他

■第8回検討会

日 時 令和5年1月16日（月）14：00

場 所 二本松市役所正庁

議 事

- (1) 検討会答申（案）の検討
- (2) その他

3

小中学校の適正規模等に関するアンケート調査の実施状況

1 調査の目的

二本松市立小学校及び中学校適正規模等調査検討会において、小中学校の適正規模等についての検討を進めるうえでの基礎資料とするために実施した。

2 調査概要

項目	内容
調査対象	市内に居住する満20歳以上の市民
標本数	2,000件
抽出方法	住民基本台帳から無作為抽出
調査方法	郵送配付・回収
調査実施時期	令和2年7月17日(金)～9月30日(水)

3 回収結果

配布数	有効回収数	有効回収率
2,000件	776件	38.8%

4

適正規模についての意識調査の実施状況（アンケート調査）

1 目的

小中学校適正規模及び適正配置に係る実施計画策定のために、小中学校の適正規模について、調査対象校の児童生徒、保護者及び教員の思いや願いなどを把握し、今後の策定に向けた基礎資料とする。

2 実施方法

調査対象校及び対象者について

現在、複式学級が設置されている新殿小、旭小、安達太良小、原瀬小4校を調査対象校として、調査対象者は、児童生徒、保護者及び県費負担教職員とした。

回答は、アンケート方式としてすべて無記名で行い、保護者については実家庭とした。

調査対象校	対象児童数	対象保護者数	対象教職員数	合計(人)
安達太良小	44	28	7	79
原瀬小	47	32	9	88
新殿小	27	23	6	56
旭小	24	22	6	52
合計	142	105	28	275
回答率	100%	95%	100%	98%

3 実施期間

令和4年10月3日(月)～10月21日(金)

5

小学校「適正規模」に関する意見を聞く会の実施状況

1 目的

「二本松市立小学校及び中学校適正規模等調査検討会(以下、「検討会」という。)」において、今後、「適正規模」についての具体的な協議を予定している。

このため、現在複式学級がある小学校4校(新殿小、旭小、安達太良小、原瀬小)の保護者から、複式学級のメリットやデメリット等の意見や思い、願い等を直接伺う「意見を聞く会」を開催し、その内容を取りまとめて検討材料として検討会へ報告する。

2 実施方法等

最初に事務局から、意見を聞く会開催の趣旨と当該校の今後の児童数推移(見込)等の説明を行い、その後に保護者から「適正規模」に関する意見(複式学級のメリットやデメリット)等を出していただく。

※検討会へ報告する意見は、「適正規模」に限定したものとする。

3 出席者

(1) 保護者 (2) 教職員(校長、教頭等) (3) 市教育委員会事務局員

4 開催状況

(1) 旭小学校

- ・開催日時 令和4年9月30日(金) 15:30～16:07
- ・場 所 旭小学校 体育館

(2) 新殿小学校

- ・開催日時 令和4年9月30日(金) 19:00～19:50
- ・場 所 新殿小学校 体育館

(3) 原瀬小学校

- ・開催日時 令和4年10月7日(金) 19:00～20:07
- ・場 所 原瀬小学校2階 多目的教室

(4) 安達太良小学校

- ・開催日時 令和4年10月14日(金) 18:30～19:21
- ・場 所 安達太良小学校 ランチルーム

5 保護者出席状況

- ・出席世帯数57世帯(実世帯110世帯) 出席率51.8%